

## Contents ▶

- 1 認証評価受審から見た教職協働の実力    2 2011年度 活動記録と予定    3 解説シリーズ⑥:紹介「TIDE現代の高等教育」と特集「成長する大学職員」    4 授業実践の現場から⑥:保育士養成にかかわって    5 お知らせ

**1 認証評価受審から見た教職協働の実力**

大学院 大学アドミニストレーション研究科 教授  
大学教育開発センター 次長 武村 秀雄

2008年5月末に、3部門(19研究員:教育職と事務職)からなる大学教育開発センターがスタートしてから、2期目(4年目)の終了を迎える。この3部門は部門主任を中心にそれぞれの事業の展開を通して確実に学内に認知され、かつ学内の他部局の教職員から積極的な協力・支援を頂けるところまで成長できたことを感謝申し上げる。この成長はセンターが滑走路から飛び立ち、第2ステージである上昇気流に乗ることができたことを意味する。こうしたセンター3部門の恒常的な役割とは別の話となるが、もう一つのセンターの果たした重要な役割として、自己点検・評価活動と認証評価に係わる展開を時系列的に紹介したい。2009年7月、佐藤東洋土学長が自己点検・評価企画委員会委員長として就任し、大越孝副学長は学長代行顧問として本格的な認証評価受審を視野に入れた全学的な企画立案の作業に入る。当センターとしては、3部門の一つ「情報評価・分析(IR)部門」の事業内容として、認証評価への対応と自己点検・評価報告書作成準備の2点が明示されていることから、自己点検・評価活動へのサポートを開始した。同年9月には学内教育組織、事務組織とセンター各部局自己点検・評価委員会委員長を中心に「2009年度全学自己点検・評価委員会」も立ちあがり、企画委員会からの提示項目について具体的な点検・評価作業に入る。

2010年6月に、「2010年度桜美林大学自己点検・評価委員会」も設置され、2009年度の業務を引き継ぐことになる。この年、当センターはサポートから一歩踏み込み、自己点検・評価委員会の事務局として位置づけられ、全学の点検・評価体制を支えていくこととなった。また重要な事項として、同年8月に「事務部門自己点検・評価事務部門実施委員会」が立ちあがり、具体的な作業に着手できる体制が整えられたことを挙げたい。因みに、本学は1994年に第1回の自己点検・評価第一次中間報告書を作成し、1997年には大学基準協会相互評価のための報告書を作成している。その後も2002年度(第2回)、2006年度(第3回)と点検・評価報告書を作成した経緯から、本学では事務職の協力・支援抜きでは自己点検・評価は不可能であることが経験知として認識されていたことから、スムーズに教職協働体制を構築できた。なお特筆すべきこととして、2010年度の点検・評価作業は認証評価を視野に入れつつも、まずは本学における「PDCA」サイクルの恒常的システム構築の出発点となった点で意義が大きい。これは毎年点検テーマを絞って評価を行い、ACT(改善策の策定・改善の実施)を展開することである。なお、2011年3月11日の東日本大震災の影響があり「2010年度自己点検・評価報告書」の発行は6月下旬になった。

2011年5月27日、佐藤学長から日本高等教育評価機構より2012年度以降の認証評価活動第2クールを想定した「試行的評価」受審参加の打診があった旨の紹介があり、さらにこの新基準での認証評価に合格すると、桜美林大学の7年に1度の認証評価義務を満たすことができるとの説明があった。大学基準協会は2011年度から第2クールに入ったが、基準協会側の評価基準や評価体制

が十分整っているとは言い難いとの判断も手伝い、機構の認証評価受審に学内コンセンサスを得ることができた。結果的には英断であったと言える。

しかしながら、2010年度の報告書をベースにして「2011年度自己点検・評価報告書」（当然ながら、機構の新基準を視野に入れて）を編集し直し、関係書類と共に2011年9月30日締め切りという4ヶ月間で提出できる完成度へ持っていく必要があった。このような状況から、2011年7月下旬「2011年度全学自己点検・評価委員会」を立ちあげた際には、既に6月中旬に「高等教育評価機構試行的認証評価認証作業チーム」（当センター発行NL,No.6を参照）を設置して、具体的な作業、特に報告書の記述根拠となるエビデンス：基礎データの収集と作成に入っていた。新自己点検・評価委員を中心に教育組織及び事務部局には評価基準に沿った「自己判定票」等の提出期限を9月上旬とし、全学をあげての理解と協力、特に事務職を中心とした作業チームの献身的な努力で、9月30日に自己点検・評価報告書・資料等の提出を無事完了できた。これは言うは易しであるが、「奇跡的な作業」であったことを強調したい。そして、11月下旬の機構の实地調査となるが、点検・評価や基準を含んだ内容確認及び人員配置等の事前準備、及び当日の万全な対応の結果、实地調査は大過なく終了できた。認証評価受審の結果に関してはできることなら達観視したい心境である。諸々の事情を超えて全学体制での自己点検・評価が実施できたことは意義深い。

センター次長としては、これら一連の作業を通して、事務職と教育職との協働作業が極めて重要であることを再認識したと共に、この認識の元、将来の高等教育機関としてあるべき教職協働システムを本学で構築することへの手応えを感じている。自己点検・評価への取り組みを学内外に周知できたこともさることながら、桜美林大学伝統の一つである「二輪車走行」の軸がさらに太くなったと誇りに思う次第である。

以上の自己点検・評価、認証評価の事例のみならず、2期4年の中で、大学教育開発センターの活動を手がかりに、或いはヒントとし、或いは批判する中で、学内の各所において何らかの形で改善が進められ、またその反響をお寄せ頂いたケースは数多い。私たちの発した「さざ波」を真摯に受け止め、対応して下さった皆様に感謝申し上げたい。

## 2 2011年度 活動記録と予定

### 活動記録

5/18 第11回FD・SD部門会議  
7/ 8 『第2回FD実施状況調査報告書』発行  
7/15 桜美林大学 大学教育開発センター  
Newsletter No.06発行  
7/27 第9回センター会議  
1/15 桜美林大学 大学教育開発センター  
Newsletter No.07発行

### 今後の予定

1/25 第6回大学教育開発センター学内シンポジウム  
3/31 『2011年度 大学教育開発センター年報』発行  
3/31 『桜美林大学 FactBook2011』発行  
年度内 第6回大学教育開発センター公開研究会

## 3 解説シリーズ⑥: 紹介

### 『IDE現代の高等教育』と特集「成長する大学職員」

#### 雑誌『IDE現代の高等教育』と大学職員特集

『IDE現代の高等教育』は、IDE大学協会が発行する月刊（年に2回合併号）の会誌である。協会は大学を中心とする日本の高等教育の充実・発展に貢献することを目的とする任意団体（現会長は森亘／元東京大学総長）であり、1954年に民主教育協会（略称IDE）として創設されて以来、IDE誌の発行に力を注いできている。紙面はその基幹部分を特定のテーマ設定による特集記事で占めており、各号のテーマは学生問題から教員組織、入試から就職、大学政策・行財政から国際動向と、高等教育をめぐる諸課題を覆っている。

直近2年分（2010年1月～ 11年12月号）をみると、「高等教育政策への期待」「揺れる世界の大学」「大学教員の現在」「学費と奨学金」「大学とキャリア教育」「大学と情報公開」「プロとしての大学職員」「高大の連

携と接続」「私大経営は危機か」「日本人学生の海外留学」「教養と大学」「大学評価とIR」「医療系人材の養成」「体験型学習の可能性」「就職難打開への道」「大学院の危機」「質保証の新段階」「女性が変わる大学」「成長する大学職員」「地域と結ぶ大学」と、時宜に応じたテーマが取り上げられていることがわかる。

ここで、2010年8・9月(523)号「プロとしての大学職員」、そして2011年11月(535)号「成長する大学職員」と、大学職員を対象としたテーマが2回取り上げられている。キャリア教育と就職、評価と質保証は、類似のテーマでは、2回ともいえるが、同じ用語が用いられているものとなると、大学職員だけである。

実は、「大学職員」がテーマとなったのは、管見では2005年4月(469)号「SD／大学職員の能力開発」が初めてであり、上記の2号の前に2008年4月(499)号「これからの大学職員」がある。このテーマが、近年重要な課題として浮上してきたものであることがわかる。

### 特集「成長する大学職員」

当該の号は下記の目次の様な構成になっており、全体で80頁の内の4頁から61頁までが特集テーマの依頼による論考で占めている。さらに70頁～76頁にある研究ノートやBook Reviewにもテーマに関連する記事が取り上げられている。

○巻頭言 地域と大学.....	佐藤 禎一
○今月のテーマ《成長する大学職員》	
大学職員は成長する.....	上杉 道世
成長する職員が大学を動かす.....	加藤 毅
実践を通じた職員の成長.....	大島 英穂
大学職員の「大学アドミニストレーター」への成長／桜美林大学.....	館 昭
大学経営・政策コースの取り組み／東京大学.....	両角亜希子
大学マネジメント人材の養成をめざして／筑波大学.....	稲永 由紀
高等教育マネジメント分野の現状／名古屋大学.....	伊藤 彰浩
教育職員の成長プログラムづくり／名城大学.....	池田 輝政
大学アドミニストレーター養成プログラム／立命館大学.....	伊藤 昇
共鳴・共感できる理念とミッションが職員を育てる／静岡産業大学.....	大坪 檀
SD事業の試行的実践／大学コンソーシアム京都.....	福岡 正栽
米国派遣による職員能力開発／福岡工業大学.....	大谷 忠彦・米田 達郎
○一滴 法科大学院問題	
○災害と大学 東北大学における東日本大震災の被災状況とその対応.....	井上 明久
○研究ノート 大学職員を養成する大学.....	高野 篤子
○Book Review 篠田 道夫著『大学戦略経営論』.....	藤田 幸男
○取材ノートから.....	山下浩二郎

同誌の冒頭で特集の趣旨を、「過去十年間で、大学職員の重要性に対する社会的認知は、飛躍的に高まってきました。業務の高度複雑化と期待の高まりを反映して、多くの大学で、さまざまなマネジメントツールや研修プログラムなどの導入が積極的に進められています。OJT(職場内訓練)だけでは対応することの困難な、高度の専門性へのニーズに応えるための大学院プログラムも、開設されてすでに十年以上が経過しました。その他にも、日本全国で、さまざまな教育プログラムが意欲的に展開されています。これらの多様なプログラムを通じて、どのような教育が行われているのか。またこれらの学びの機会を通じて職員はどのような成長を遂げ、そして成果をあげているのか。今後のさらなる発展を期待して、特集を組みました。」としている。

### 同誌の所在

今回の特集に限らず、この雑誌では、先に示した様に、大学にかかわるほとんどすべての課題が取り上げられていることから、実務面でも、研究面でも有用性が高い。会員誌であり、書店の店頭にはないが、本学を含む会員大学や個人会員が所持している。本学においては、町田キャンパス図書館本館及び四谷キャンパス図書室で閲覧できるし、IDE事務局に連絡すれば直接購入することができる。(館 昭 記)



## 4 授業実践の現場から⑥：保育士養成にかかわって

健康福祉学群教授 広瀬 隆雄

本学で保育コースがスタートして今年で6年目になる。この間、保育士養成にかかわってきたが、教育現場でいま何が求められているかについてのべてみたい。

保育コースでは保育士の資格と幼稚園教諭の免許が取得できる。保育士の資格といっても、その取得にはかなり多くの資格関連科目の学習が必要である。本学の場合、単位数で90単位ほどになる。これに幼稚園教諭免許を加えると、全体で100単位近くになる。卒業に必要な単位数は124単位なので、その大部分が資格関連科目の学習に費やされる。

これらの学習を通して、保育に関する専門的な知識・技能を身につけることになるが、それで十分というわけではない。ある意味では、それらは保育士に必要な最低限の知識・技能といえる。保育現場で通用する力量を形成するには、保育に関わる実践を数多く積み重ねることが重要である。実践とその反省のくり返しの中で、はじめて生きた知識や技能が身につく。

実習を終えた保育のある学生が、こんな話をしてくれた。昼食の時間になってもおもちゃ遊びをやめない男児に注意したが、言うことをきいてくれない。そこで以前見たベテランの保育士の言葉かけをまねてみた。「先生とどっちが早くお片付けができるかな?」。すると子どもはすぐに片付け始めた。別の日にまた男児が遊びに熱中していたので、同じセリフを言ったところ、その子が「○○先生と同じ事を言うね」とつぶやいて、今度は言うことを聞いてくれなかったという。

これは失敗談であるが、学生にとっては貴重な体験であった。学生はこの失敗から、ワンパターンの働きかけではダメで、子どもの状況に応じて、柔軟に対応することの大切さを学んだという。見たこと、教えられたことの実

践だけでなく、自分なりに考えて行動することの重要性を痛感したにちがいない。

日々の学習成果の点検や自らの実践の反省という意味で、保育実習という授業は重要な意義をもつ。しかし、それは短い期間での実践体験にすぎない。主体性や柔軟性を身につけた保育士を養成するためには、授業内の取り組みだけでなく、授業外のプラスαが不可欠である。

このプラスαとは、たとえば、アルバイトでもボランティアでもよいから、在学中に保育所等の現場で数多くの体験をすることである。あるいは保育に関するサークルや研究会を自発的につくり、そこで活動することである。こうした積極的な取り組みが、保育士としての実践的な力量を育てることになる。

しかし、現実には自ら積極的に動く学生はそれほど多くない。そこで教員側から働きかけて、学生の自主的活動を促す取り組みを行っている。その一つが、保育所でのボランティア活動である。町田市の公立保育園と連携して、保育学生のボランティア体験の機会を提供している。1年生の半数近くがボランティアとして参加し、そこで実践的な体験をしている。

もう一つは1年生を対象にした「基礎プログラム」の実施である。これは保育教員のサポートのもとに行われる、学生による自主的なイベント活動で、6月の「七夕まつり」、10月の「ウォーキング」、12月の「クリスマス会」がある。これらはすべて学生が主体的に企画・運営し、当日は保育の全教員も参加して、共にイベントを楽しむ。

大学での授業の充実とともに、こうした授業外のプラスαをいかに充実させるかがいま求められている。

## 5 お知らせ

### 第6回 大学教育開発センター学内シンポジウム **これからのSDを考える**

日 時 2012年1月25日(水) 18:00-20:00 会 場 崇貞館 6階 H会議室

プログラム ○基調講演「これからの大学職員とSD」 山本 眞一 (広島大学高等教育研究開発センター 教授)  
○パネル討論

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 其中館 1階 101 TEL.042-797-6724 (内 3250) FAX.042-797-6398

E-mail : [fdcenter@obirin.ac.jp](mailto:fdcenter@obirin.ac.jp) Web : <http://www.obirin.ac.jp/ri/fdcenter/>